

インタラクティブセッション1

日時：2022年6月11日（土）8:30-10:00

【ナッジで拓くプライマリ・ケアの新しい扉】

＜企画責任者＞ 五十嵐 俊（横浜市立市民病院 感染管理室/医療安全管理室）

司 会 五十嵐 俊 （横浜市立市民病院 感染管理室/医療安全管理室）

演 者 竹林 正樹 （青森県立保健大学 公衆衛生研究室）

＜企画概要＞

ナッジ（nudge：直訳は「肘で軽く突く」）とは、選択の自由を確保しながらよい行動へと促すアプローチで、2017年にナッジの提唱者・R. Thaler 博士がノーベル経済学賞を受賞しました。日本でも政策やビジネスなど幅広い分野でナッジを活用する動きが活発になってきています。また、健康寿命延伸プラン（厚生労働省）では2022年度までにナッジ等を用いて自然に健康になれる環境づくりに取り組む企業・団体を7,000にする目標を立て、幅広い分野でナッジへのニーズが高まっています。医療や介護、医療政策でも対象者の自発的な行動を引き出す介入が求められ、特に「健康の大切さをわかっている、実際には健康行動をとれない人」に対して、ナッジを活用することにより対象者の行動変容やケア効果の向上が期待されます。本セッションでは、ナッジ研究者の竹林正樹氏がナッジを紹介し、参加者の課題についてナッジを切り口にした解決策を検討するWSを行います。「参加者が明日からの業務に役立つ発見を刺激し、自発的に行動したくなる」というナッジのコンセプトを体現したセッションを実施します。

インタラクティブセッション2

本大会では中止となりました。



第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会
The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association

2022年6月11日(土) ~12日(日) | パシフィコ横浜

インタラクティブセッション3

日時：2022年6月11日（土）10:15-11:45

【Mapping Uncertainty in Medicine を通して、

プライマリ・ケアの不確実性を学びほぐす】

<企画責任者> 井上 和興（大山診療所/鳥取大学医学部地域医療学講座）

座 長 谷口 晋一（鳥取大学医学部地域医療学講座）

司 会 井上 和興（大山診療所/鳥取大学医学部地域医療学講座）

講 師 懸樋 英一（鳥取市立病院）

講 師 櫻井 重久（鳥取市立病院）

講 師 孫 大輔（鳥取大学医学部地域医療学講座）

講 師 朴 大昊（ファミリークリニック加古川）

講 師 李 瑛（鳥取大学医学部地域医療学講座）

<企画概要>

みなさんは、臨床現場の不確実性をどのようにとらえているのでしょうか？何をしたらいいかわからない状態に陥ったことはあるのでしょうか？プライマリ・ケアや地域医療の現場では、今後の経過が予測不能で何をしたらいいかわからない健康関連問題やマネジメントでの問題で溢れています。そのような不確実性に直面したとき、どのように捉えるかの方法論として Mapping Uncertainty in Medicine (MUM) があります。この方法を活用することで、臨床現場の不確実性を、分析/ネットワーク/交渉/チームワークに分類し構造的にアプローチをすることができるようになります。企画は、不確実性の高い事例を、MUM で構造化することを通して、臨床現場の不確実性にどのように対処するか参加者のみなさんと考えることを目的とします。この企画によって、不確実性にあふれた臨床現場に立ち向かう思考プロセスを学びほぐすことをめざしていきたいです。

インタラクティブセッション4

日時：2022年6月11日（土）10:15-11:45

【「日常診療を書くこと」を分析してみよう

-質的研究の視点と診療の分析の統合の試み-

<企画責任者> 宮地純一郎（北海道家庭医療学センター/名古屋大学）

司 会 宮地純一郎（北海道家庭医療学センター/名古屋大学）

司 会 森下真理子（京都大学大学院医学研究科 医学教育・

国際化推進センター/京都保健会仁和診療所）

講 師 岩隈 美穂（京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻

医学コミュニケーション学）

講 師 島蘭 洋介（大阪大学 グローバルイニシアティブ機構）

<企画概要>

多くの方にとって質的研究は、言語を分析する複雑なプロセスで、診療とは縁遠いもの、というイメージがあるかもしれません。本企画では、社会科学分野の知見を学ぶ症例検討会を企画したり、社会科学分野の研究者と協働してきた家庭医が、質的研究を診療の分析に用いる試みに挑戦します。具体的には、皆さんの診療行為を記録した媒体（例：症例サマリーや振り返り、ポートフォリオ）について、書くプロセスを俯瞰したり、書かれた内容を、哲学・言語学・人類学の視点を組み合わせて分析することによって、診断や治療の分析とも、BPSモデルによる心理社会的な分析とも異なる視座を当てることを行います。今までにあまり行われてこなかった実験的なセッションなので、どんなアウトカムが出るのか、何が学べるのかは蓋をあけてみなければわかりませんが、「診療について書く」ことに新たな視点を取り入れたい方の参加をお待ちしております。

インタラクティブセッション5

日時：2022年6月11日（土）14:45-16:15

【ケースレポートを書こう！ -acceptされるために必要なこと- 2022】

<企画責任者> 見坂 恒明（県立丹波医療センター）

司 会 立花 祐毅（沖縄県立八重山病院内科）

ファシリテーター 合田 建

（兵庫県立丹波医療センター地域医療教育センター神戸大学大学院
医学研究科地域医療支援学部門/丹波市ミルネ診療所）

ファシリテーター 隈部 綾子（神戸大学大学院医学研究科地域医療支援学部門/
公立豊岡病院総合診療科）

ファシリテーター 八幡 晋輔（製鉄記念広畑病院総合診療科）

ファシリテーター 小佐見光樹（自治医科大学地域医療学センター 公衆衛生学部門）

ファシリテーター 角谷 慶人（University of Ottawa Heart Institute,
Department of Cardiac Imaging）

ファシリテーター 鎌田 百香（公立宍粟総合病院内科）

ファシリテーター 森 寛行（兵庫県立丹波医療センター内科/
丹波市ミルネ診療所）

<企画概要>

臨床研究に比し軽視されがちですが、医学研究においてケースレポートが果たす役割は大きく、臨床医学を切り拓いてきたのはケースレポートです。また、当学術集会で学会発表後、論文化される数が極めて少ないことが指摘されてます。一方で、臨床研究に比し、ケースレポートは accept されるのが難しく、paper writing の腕の見せ所で、書き方の原則を知る必要があります。疾患頻度が「稀」なだけでは、論文化できません。企画者らのグループは、PubMed 掲載誌に 2021 年も 10 本以上のケースレポートが掲載されていますが、実際のレポートをもとに、どのようにレポートの「新規性の軸」を設定し、accept されたのかを提示します。また、いくつかの症例を提示し、どのような軸の設定、構成にすれば、accept される可能性が高くなるのかを、グループディスカッションします。当学会を超えて、関連書籍（「オールインワン 経験症例を学会・論文発表する Tips」など）や雑誌連載（「続・ケースレポートを書こう！」



第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会
The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association
2022年6月11日(土)～12日(日) | パシフィコ横浜

論文の軸の設定「トレーニング」等で好評を得ている内容をもとに、当学術大会用にリメイクした2022年Verです。



第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会
The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association
2022年6月11日(土) ~12日(日) | パシフィコ横浜

インタラクティブセッション6

日時：2022年6月11日（土）16:30-18:00

【実はあなたがキーパーソン?! 多職種で目指す、

診断的安全性が高い組織への道】

<企画責任者> 原田侑典（獨協医科大学病院総合診療科）

座長 原田 侑典 （獨協医科大学病院総合診療科）

演者 國友耕太郎 （国立病院機構熊本医療センター総合診療科 医師）

演者 畑 拓磨 （水戸協同病院総合診療科 医師）

演者 山口 章江 （十勝勤医協帯広病院 薬剤師）

演者 芦野 朱 （医療生協家庭医療学レジデンス・東京 事務）

演者 幌 沙小里 （勤医協札幌病院 看護師）

演者 坂田 一樹 （長野中央病院 放射線技師）

演者 林 良典 （NTT 東日本関東病院 医師）

演者 原田 拓 （練馬光が丘病院 医師）

演者 石塚 晃介 （千葉大学医学部附属病院総合診療科 医師）

演者 相馬 渉 （ファルマ弘前薬局 薬剤師）

演者 宮上 泰樹 （順天堂大学医学部総合診療科学講座 医師）

演者 鈴木 智晴 （浦添総合病院 医師）

演者 倉澤 康之 （長野医療保健大学 理学療法士）

演者 杉原 大輔 （長野中央病院 医療ソーシャルワーカー）

<企画概要>

適時で適切な診断の機会の逸失を意味する「診断エラー」が近年の問題となっていることをご存知ですか？ 診断は医師の仕事だから関係ないと思ったあなた、実は深く診断に関わっているかもしれません。 外来の待ち合いにいる患者や、デイの利用者の様子がおかしい、薬局で同じ市販薬を頻繁に買う人がいる、変な検査所見があるなどに気づいた時、あなたの行動によって診断エラーを防ぐことができる可能性があり、近年では、診断は複数の職種が連携して行うも



JPCA 2022
YOKOHAMA

第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会

The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association

2022年6月11日(土)～12日(日) | パシフィコ横浜

のへと認識が変わりつつあります。本セッションでは、診断エラーとは何か、どのようにして起きるのかについての科学的知見を総論レクチャーで学んで頂いた後に、診断エラーが起きた症例や診断が上手くいった症例を提示し、診断プロセスにおいて様々な職種がどのように関わっているかを「見える化」します。さらに、「見える化」した内容を分類し、診断の質を上げるために個々の職種が行えること、多職種チームとして行えることを検討します。診断的安全性が高い組織を目指すための基礎をぜひ身に着けましょう。



JPCA 2022
YOKOHAMA

第13回 日本プライマリ・ケア連合学会 学術大会
The 13th Annual Conference of Japan Primary Care Association

2022年6月11日(土)～12日(日) | パシフィコ横浜

インタラクティブセッション7

日時：2022年6月11日（土）16:30-18:00

【未来研究リーダー人材養成プロジェクト報告会】

<企画責任者> 後藤 亮平（筑波大学）

座長・司会 後藤 亮平 （筑波大学）

座長・司会 青木 拓也 （東京慈恵会医科大学）

座長・司会 佐藤弘太郎 （北海道家庭医療学センター）

座長・司会 井上真智子 （浜松医科大学）

演 者 山本 洋介 （京都大学医学部附属病院 臨床研究教育・研修部）

演 者 宮森 大輔 （広島大学病院 総合内科・総合診療科）

演 者 栗原 健 （浦添総合病院 病院総合内科）

演 者 松永 拓 （浜松医科大学医学部附属病院総合診療専門研修プログラム/
森町家庭医療クリニック）

<企画概要>

我が国におけるプライマリ・ケアの現場からの科学的なエビデンスの発信は極めて少ないという現状です。そこで本学会プロジェクトの一つとして、地域医療の現場を熟知し、かつリサーチマインドと高い研究能力を持つ人材の育成に向けた「未来研究 リーダー人材育成プロジェクト」が、2017年から開始されました。プロジェクトの対象となった研究指導拠点（責任者）や研修生には、毎年学術大会において進捗報告を行っていただくことになっています。次回の学術大会においても例年同様に報告会を開催したく企画いたしました。

インタラクティブセッション8

日時：2022年6月12日（日）8:15-9:45

【家庭医療私的クリニカルパール】

<企画責任者> 藤沼 康樹（CFMD 東京）

司会・演者 藤沼 康樹 （CFMD 東京）

<企画概要>

およそ30年で蓄積してきた家庭医療外来、在宅診療における私的なクリニカルパールを共有しつつ、その含意するところを検討したいと思います。疾患の診断と治療に関するものだけでなく、コミュニケーション、ナラティブ、教育、家庭医としてどう生きていくか？などを一緒に考える機会をつくれます。

インタラクティブセッション9

日時：2022年6月12日（日）10:00-11:30

【へき地発！総合医に役立つ整形手技ハンズオンセミナー】

<企画責任者> 田中 拓（川崎市立多摩病院救急災害診療センター）

司 会 田中 拓 （川崎市立多摩病院救急災害診療センター）

司 会 野村 悠 （川崎市立多摩病院救急災害医療センター）

<企画概要>

プライマリ・ケアの現場で使える手技をハンズオンで学んでいただきます。地域の診療所や救急当直ですぐに整形外科を受診して頂くことも難しかったり、自分の手で処置をしたいけれど自信が無かったりすることも多くあります。今回はそんな中で知っているとちょっと役に立つ手技として、
・手指外傷に対する処置
・肘内障、肩関節脱臼整復
・良肢位固定 などの処置を実際に手を動かして体得して頂きます。指導に当たるのは地域医療の現場を良く知る整形外科医、救急医達です。知識はインターネットや本で習得することができますし、イメージはYouTubeなどの動画でも得ることができます。しかし、本セッションでは実際に触れること、動かすことによる感覚を得て頂きたいと考えています。

インタラクティブセッション10

日時：2022年6月12日（日）12:30-14:00

【多職種で実践！患者協働促進ツール！

Japanese Patient Engagement Promotion Tool (J-PEPT)】

＜企画責任者＞	青木 拓也	（東京慈恵会医科大学）
司 会	安本 有佑	（板橋中央総合病院）
演 者	栗原 健	（名古屋大学）
演 者	青木 拓也	（東京慈恵会医科大学）
ファシリテーター	小坂鎮太郎	（練馬光が丘病院）
ファシリテーター	居安 綾子	（岡山家庭医療センター 津山ファミリークリニック）
ファシリテーター	山口 章江	（十勝勤医協帯広病院）
ファシリテーター	吉田 智美	（筑波大学大学院 システム情報工学研究群 博士後期課程）
ファシリテーター	丹野 清美	（国立病院機構東京医療センター臨床疫学研究室）
ファシリテーター	井上 恵子	（一般社団法人 医療開発基盤研究所）

＜企画概要＞

プライマリ・ケアにおいては、従来の医療従事者中心の考え方に加えて、ケアを受ける当事者である患者・家族の積極的な関与、つまり患者協働を奨励し、医療の質や患者安全を協力して向上することが重視されている。第12回学術大会では、患者協働の理論、ツールや実装方法などを紹介し、参加者が患者協働を知るきっかけとなるシンポジウムを開催した。そこで、本大会では実際に医療現場で多職種による患者協働をどのように実践するかを体験し、現場での実装について議論したい。実際の症例をもとに、どのように多職種で患者協働を促すのか、どのようにアウトカムを評価するべきかについて体験し、各医療現場で実践できるものを提供したいと考えている。プライマリ・ケア領域における患者協働の実装を通して、医療の質・患者安全の向上に寄与するセッションを目指したい。

インタラクティブセッション11

日時：2022年6月12日（日）14:15-15:45

【総合診療でのPOCUS活用 診療医と専門技師の視点の違い】

<企画責任者> 島田 恵（東海大学医学部附属大磯病院総合内科）

座長・演者 島田 恵（東海大学医学部附属大磯病院総合内科）

座長 村田 光繁（東海大学医学部附属八王子病院臨床検査学）

演者 西山 雷祐（東海大学医学部附属大磯病院救命救急科）

演者 内田 泰至（内田クリニック）

演者 高梨 昇（東海大学医学部附属大磯病院中央臨床検査科）

演者 檀上 範子（東海大学医学部附属大磯病院中央臨床検査科）

演者 山本 真一（東海大学医学部附属大磯病院中央臨床検査科）

<企画概要>

総合診療の外来は患者の様々な主訴に対して短時間で診断に関しての重要な情報を得る必要がある。一方超音波検査は機器の小型化も進み、救急医療や集中治療、在宅医療などでの、Point-of Care Ultrasound (POCUS) が活用されるようになってきた。本セッションでは、診療医と専門技師の視点からのエコー活用の違いから総合診療におけるPOCUS活用法を明らかにする事を目的として企画した。本企画では、総合内科、救急外来、及び在宅医療においてのPOCUS活用の現状を診療医（病院総合内科医、救急医、在宅医）から紹介した上で、心エコー、腹部エコー、血管エコー（下肢静脈エコー）の専門検査技師3名からそれぞれの分野での検査や指導の内容を説明していただき、総合診療でのPOCUSをどのように構築し、若いスタッフたちに教育していくかを議論したい。

インタラクティブセッション12

日時：2022年6月12日（日）14:15-15:45

【みんなでつくろう地域ケアレシピ集・第7弾～レシピを探究しよう～】

<企画責任者> 井階 友貴（福井大学医学部地域プライマリケア講座）

司 会 井階 友貴 （福井大学医学部地域プライマリケア講座）

司 会 漆畑 宗介 （湖東厚生病院）

司 会 新野 保路 （福井大学医学部附属病院総合診療部/

南越前町国民健康保険今庄診療所）

司 会 密山 要用 （王子生協病院、東京大学医学教育国際研究センター

医学教育学部門）

司 会 守本 陽一 （公立豊岡病院組合立出石医療センター）

司 会 山本 竜也 （手稲溪仁会病院）

司 会 渡部 健 （秋田大学医学部附属病院）

<企画概要>

全国各地で様々な地域ケアが施されているが、全く同じ状況の地域は2つと存在しないため、全国どこでも通用するケアのマニュアル化、一般化は困難であり、本質的ではない。当プロジェクトチームでは、地域のあらゆる医療・健康にまつわる問題に対して、各地で効率的な取り組みが実現するように、地域ケア事例を可及的広く集積し、分類・共有・更新することで、全国各地で類似の問題およびその介入事例を参考にできる「地域ケア事例集」の作成を進めている。第6回学術大会のWSで地域の問題点の分類を参加者とともに完成させ、第7～12回のシンポジウムで試行登録の計13事例を紹介した。今回、「事例を探究する」をテーマに、集まっている各地の事例を複数例発表いただき、学会員と事例解釈を深めるインタラクティブセッションを提案する。本セッションが地域ケア事例集の有用性の気付きおよび日々の活動への導入の契機になればと考えている。